

中道嘉彦先生ご退職記念特集



中道先生最終講義（平成30年1月23日）

はしがき

麗澤大学英米文化研究会会長 日 影 尚 之

麗澤大学教授、中道嘉彦先生が平成30年3月末をもって専任の職を退かれました。先生は本学の外国語学部英語学科、平成20年の学部改組後は英語コミュニケーション専攻および英語・英米文化専攻（英語・リベラルアーツ専攻）および大学院言語研究科で長年学生を親身に指導されてきたのみならず、英語学および英語教育の専門家として英米文化研究会を牽引し、その活動を支えてくださいました。以下のご経歴には会長としての任期が記載されているだけですが、実は会計の任も引き受けてくださるなど、大変お世話になりました。

お陰様で学会誌の『麗澤レビュー』は第24号を発刊するに至っています。会員の専門分野は多様化しており、英語教育、英語学（言語学）、コミュニケーション学、異文化コミュニケーション学、英米文学・文化、女性学、文化人類学、法制史、カナダ史、アメリカ史、批評理論、比較文明学、宗教学、…実に様々ですが、中道嘉彦先生は其中でも英語学（特に英語史、音声学・音韻論）、英語教育の

面から本研究会の重要な活動を担ってくださいました。『麗澤レビュー』にも数多くの論文を寄稿してくださいましたが、これについてはご業績の欄をご覧ください。

個人的なことです。何年前かに英語の2専攻の新入生フレッシュマンキャンプでのTeachers' Playという英語パフォーマンスで、中道先生が掃除夫の役で舞台をモップがけする場面があり、その時の先生の愛嬌のあるお顔・お姿が忘れられません。ほんの一瞬舞台上に登場するだけなのですが、その優しい人柄がにじみ出てくる、そういった存在感をお持ちです。そう言えば中道先生は、学生時代英語劇で『マクベス』の主役を演じられたそうですが、運命に翻弄され苦悩する同名の主人公を演じる中道先生のお姿をぜひ見てみたかったな、と思います。

中道先生におかれましては、今後も教育者として、研究者として、人生の先輩として私たちをご指導下さり、麗澤大学そして英米文化研究会を支えてくださりますようお願い申し上げます。

中道嘉彦先生 略歴

学歴

1971－1975	麗澤大学外国語学部イギリス語学科（入学・卒業）
1975－1976	米国カリフォルニア州Johnston College留学（入学）
1976－1977	米国カリフォルニア州UCLA、TESL Certificate Program留学（入学・修了）
1978－1981	国際基督教大学大学院教育研究科博士前期課程英語教育専攻（入学・修了）
1981－1984	慶応義塾大学大学院文学研究科博士後期課程英文学専攻（入学・満期退学）
1986－1986	英国Reading大学、CALSにて研修

学位

教育学修士（国際基督教大学、1981）

専門分野

英語音声学・音韻論、英語史、宗教演劇

所属学会

1985－2018	日本中世英語英文学会会員
1994－2018	日英・英語教育学会会員 (1977－1999 運営副委員長、1999－2003 運営委員長、2009－2013 副会長)
1995－現在	麗澤大学英米文化研究会会員 (2010－2012 会長)

主要職歴

1977－1980	麗澤高等学校講師（英語）
1981－1982	麗澤大学日本語研修課程講師（日本語）
1981－1983	麗澤大学外国語学部助手
1983－1988	麗澤大学外国語学部講師
1988－1995	麗澤大学外国語学部助教授
1992－2015	川村学園女子大学非常勤講師（英語）
1995－2018	麗澤大学外国語学部教授
2010－2018	麗澤大学大学院言語教育研究科教授

主要学内活動

1985－2017	留学担当（フットヒル大学、レッドランズ大学）
1988－1995	麗澤大学英語教授法セミナーの企画と実施（第1回－第8回を担当）
1999－2003	英語学科主任
2014－2018	麗澤大学学生相談センター長

英語に関わって50有余年

中 道 嘉 彦

はじめに

2018年3月、私は定年を迎えました。『麗澤レビュー』編集担当責任者の高本先生から麗澤大学在職中の教育・研究実践、思い出などを振り返って投稿するように、と依頼されました。一般に研究と教育が大学教員の主な仕事といわれますが、私としては十分な成果を挙げた自覚はなく、ただ学生時代に受けた様々なご恩に少しでもお返しができればという思いで、頑張ってきたつもりです。英語に関する拙い経験を披露するのは恥ずかしい限りですが、それでも私の限られた経験が少しはお役に立つのではないかと考え、筆を取ることにしました。高本先生には、拙文の内容を在職中に限定せず、就職時点から少し遡ることを許して頂きました。というのは、私の在職中の教育や研究などにおける実践のルーツは麗大在学中、あるいはそれ以前にもあると考えるからです。

英語に興味を持ったきっかけ

私は北海道夕張郡由仁町の出身です。この町は水田と畑がどこまでも広がっている、のどかな田園地帯にあります。実家の前からは馬追丘陵、後ろには夕張岳が遠望できます。外国人は一人もおりません。そんな町で生まれ育った私が英語に興味を抱いたのは、今から55年前、小学校の国語の時間にローマ字を学んだことに始まります。担任の浜田末三先生が、ひらがなよりも小さな音の単位があるということを、実験で見せてくれたのです。当時はまだ珍しかったオープンリール式テープレコーダーに「しんぶんし」という回文を録音し、逆回転で再生してくれました。ひらがなの「しんぶんし」は左から読んでも右から読んでも「しんぶんし」ですが、逆回転再生した「しんぶんし」は「しんぶんし」とは聞こえませんでした。意味不明の言葉が再生され、「あれ、おかしいな」と思いました。次に「あか」を逆回転再生すると、回文ではないのに「あか」と聞こえました。これにはもっと驚きました。今になって思えば、か行より後ろのひらがなは「子音+母音」からできているので、「あか (aka)」は右から読んでも左から読んでも同じ言葉になる回文だったわけです。

俄然、横文字に興味を持った私はローマ字練習用のノート（表紙には美しい筆記体で“Penmanship”と書かれていた）を買ってもらい、点線で書かれた手本の文字をなぞって、何回も書きました。特に筆記体は文字と文字を繋げて書くのが格好良く思えて、うまく書けるように練習を重ねました。その結果、中学校に入る前にはアルファベット26文字（大文字と小文字、ブロック体と筆記体）を完全にマスターしていました。人はいつ何に興味を持つようになるかわかりません。子供にはできるだけ多くの刺激を与えてあげるものだ、とつくづく思います。

中学・高校では英語の先生に恵まれました。中学の先生はNHKラジオ講座を聞くように助言してくれました。また世界で一番長い英単語はこれだ、とばかりに何度も黒板いっぱいに floccinaucinihilipilification（当時の信頼できる辞典に「((英戯言)) (富などの) べっ視、軽視 (estimating as worthless) : the ~ of wealth.」と出ています) と大書して英語への興味を掻き立ててくれました。高校では disease が dis と ease に分解できることや、英語の諺を用いて文法や語法から韻やリズムの美しさまでも教わりました。

麗澤大学での英語の学び、始まる

やがて麗大のイギリス語学科に進学。当時の麗大は外国語学部のための単科大学でした。イギリス語40名、ドイツ語25名、中国語25名、一学年の定員90名という、日本でもおそらく最小規模の部類に入る大学でした。全寮制でしたので学生は学園内で生活しておりましたが、実は日本人・外国人数員の多くも園内の職員住宅に住んでいました。学生と教員が心理的にも物理的にも非常に近い関係にあり、大学自体がいわば大家族のようなものでした。寮の先輩がよく住宅訪問に連れていってくれました。夕食後、部屋のメンバーで園内在住の先生宅を訪問、寮生活やクラブ活動、勉強やバイトのこと、先生の若かりし頃のエピソードなどを伺い、お茶とお菓子をご馳走になって帰寮するというものです。よく麗大は先生と学生の距離が近い、と評されますが、そのルーツは住宅訪問にあるのかもしれません。

さて、家族的雰囲気のある小さな大学で、専門的に英語を勉強し始めることになります。専門的と言っても、いきなり

英語学や英米文学を勉強するわけではありません。1、2年生では、当然のことながら英語の4技能を伸ばすのに力が注がれました。1年次の英語専門科目は週に演習6コマとイギリス事情1コマでした。このように書くとは高校の延長のように聞こえるかもしれませんが、実際にはかなりアカデミックなことも行われていました。入学早々にタイプライターを購入し、先輩に教わってタイプ打ちの練習をしました。そして何と1年生の1学期の講読演習（担当はアメリカ帰りの川窪啓資先生）の課題に数ページの英語小論文、いわゆる「ペーパー」が出ました。しかも最初の表紙から最後のbibliographyに到るまで、MLA書式に基づいた本格的なものでした。当時の日本で1年1学期の課題に英語のペーパーを出す大学がいくつあったのでしょうか？「4年間で英文を100ページ書いてもらいます」が口癖の川窪先生。その後の英語専門科目には必ずペーパーがついて回りましたし、卒論は全員英語で書きましたので川窪先生の100ページ発言はそれほど無謀な数字ではなかったのかもしれませんが。また専門の授業の教科書には盛んに分厚い名著が用いられました。具体例をあげるとMax Lerner著*America as a Civilization*（「アメリカ事情」）、Geoffrey Moore著*AMERICAN LITERATURE*（「アメリカ文学史」）、Oscar Handlin著*The Uprooted*（「講読」）、*The NORTON ANTHOLOGY of ENGLISH LITERATURE*（「イギリス文学史」）などが記憶に残っています。のちにはA. C. Baugh著*A History of the English Language*、A. J. Toynbee著*A Study of History*なども使われました。

単位にならない勉強会

正規の授業に加えて、単位にならない勉強をさせて頂いたのには本当に感謝しています。学生が申し出れば、あるいは先生の呼びかけに学生が応じれば、いろいろな勉強会が成立したのです。2・3例を挙げると田中駿平先生は「シェイクスピア輪読会」を開いてくださいました。毎週火曜日の夜、学生4・5名が先生のお宅にお邪魔して、シェイクスピアの作品を原文で読むのです。この会は3年ほど続き、8作品ほどを読みました。ある晩、先生のお宅に実兄であり名優の田中邦衛さんが見えていて、当時読んでいた『真夏の夜の夢』のテキストにサインして頂きました。これは私の数少ない宝物の一つです。川窪啓資先生は「英文モラロジー研究会」という勉強会を主宰され、本学建学のバックボーンになっているモラロジーを英語で解説した*Towards Supreme Morality*を読みました。おかげでbenevolence、tolerance、self-examinationなどの難しい単語も覚えました。また研究会の小山高正先輩と一緒に、川窪先生監修のもと、このテキストの語彙集を作りました。A Glossary to *Towards Supreme Morality*といいます。英・和の部、和・英の部あわせて18ページという小冊子です。1年生だった私は先輩が用意してくれた原稿をオリベッティのタイプライターでパチパチ打ち、和文は手書きで仕上げました。後に、英和辞典をいくつか手がけるようになりましたが、この一夏の経験が役立ったと思っています。

またご自身も詩人のG. バントック先生は「英詩の会」を開いてくださいました。当時3年生の私はイギリス文学史の授業を履修しており、丁度それを補う形で、Anglo-Saxon Poetryから現代に至る主要な作品に解説を加え、さらに朗読してくれたのは、大変助かりました。バントック先生お気に入りの詩人、Dylan Thomasが書いたAnd death shall have no dominionの力強さとリズムの美しさは今も耳に残っています。これら単位にならない勉強会は全て先生のお宅で行われました。他の大学には見られない麗大のユニークな点だと思います。

単位にならない勉強こそが本当の勉強であり、実力もつくという信念から、教員になってから学生さんに呼びかけて、単位にならない勉強会をいくつか開いたことがあります。英検対策講座は有志を募って何回も開きました。受験勉強を続けるには強い意志が必要ですし、まして単位というニンジンがなければ脱落者が出てしまいます。数回で参加者は激減しましたが、残った学生にはそれなりの成果が出ましたので、こちらにもやり甲斐がありました。珍しかったのはトルコ語の勉強会です。ある日、学生がトルコ語を勉強したいと漏らしました。私も語学の教員としてレパトリーを広げたかったので、一緒に勉強しようということになりました。テキストと辞書を買求め、一対一で素人同士の勉強を1年ほど続けました。そして小学校4年生レベルのトルコ語なら読めるようになったと思います。現在は全学生を対象にALSCのCommon Roomにて「発音クリニック」を行なっています。Diagnostic passageを学生さんに音読してもらい、間違いがあれば指摘し、発音の仕組みや改善の方法を教えています。また教育実習に出かける直前の学生さんには教科書の担当箇所を音読してもらい、発音の間違いがないかどうか確認をしています。ネイティブに近づくコツ、英語らしく聞こえるコツなどを教えています。

先輩が後輩を指導

学習面でも先輩が後輩の面倒を見るという伝統がありました。その典型的な例が中国語学科の発音練習です。寮の部屋は同じ学科の3・4名の学生からなっていたので、空いた時間に上級生が新入生に四声を教えたり、漢詩の暗唱をさせたりしました。もし新入生の発音が芳しくなければ、指導した上級生が先生に叱られたそうです。

次の2つは私が麗大に就職した頃の話です。1980年代の始め頃、イギリス語学科ではEarly Morning Classを行なっていました。1限が始まる前の30分間、発音に関する講義（発音の仕組み、母音と子音の解説と発音練習）とグループ・ディスカッション（2・3名のグループに先輩が1人加わり、話し合いをリード。テーマは自己紹介、家族、寮生活、クラブ活動など）を交互に行いました。朝は1分でも長く寝ていたい上級生、新入生、そして若手教員には正直つらいものがありました。しかし、4月から5月まで行なった早朝授業は学園生活への導入や英語に興味を持ってもらう良い機会に、あるいは健康的な生活を始めるきっかけに

なったと思います。ドイツ語学科には夏休みの谷川合宿がありました。ドイツ語は文法が難しいためか、文法未消化の学生がでるようです。そんな1年生を谷川セミナーハウスへ連れていき、上級生やドイツの提携校から来ている留学生に、1学期に勉強したドイツ語総復習のお手伝いをさせるのです。わからないことがあれば、すぐ近くに質問できる先生や上級生がおり、ドイツ語会話の練習相手もいますので、これほど恵まれた環境はありません。このおかげで1年生はスムーズに2学期の授業に入っていけます。これら3学科有志による活動も単位にならない勉強会の一形態といえましょう。

課外活動での思い出

当時は3学科ともに語学劇の上演が盛んで、11月の大学祭での公演に向けて、各学科の劇メンバーはかなりの時間とエネルギーを注ぎました。特に英語劇は長い歴史と伝統を誇り、その起源は麗大の前身であるモラロジー専攻塾時代にまで遡ります。かつては『ベニスの商人』、『マクベス』、『ハムレット』などの名場面を抜き出して、上演していたそうです。私はずっと新しく、1972年に『マクベス』の主演をやらせてもらいました。セリフは現代英語ではなく、シェイクスピア英語そのものを使いましたので、英文の理解や大量のセリフを覚えるのに一苦労しました。幸いなことに、その前年には田中先生宅で行われたシェイクスピア輪読会で『マクベス』を読んで粗筋は頭に入っており、それが舞台上で演じる際にとても役に立ちました。この『マクベス』はバントック先生指導のもと、シェイクスピアの作品を最初から最後まで通して上演した初めての試みでした。またその年には柏市民文化会館が竣工、そのこけら落しの一環として文化会館大ホールでも『マクベス』を上演する機会に恵まれました。麗澤瑞浪高校の生徒さんにも観せたい、というバントック先生の強い希望から、わざわざ岐阜県まで赴いて瑞浪公演も行いました。大変な熱の入れようでした。

1973年5月にはPeter Brook演出、Royal Shakespeare Companyによる『真夏の夜の夢』の来日公演を日比谷の日生劇場へ観に行きました。真っ白な舞台に真っ白な壁とブランコのみ、というシンプルなセット、幕を降ろさずにテンポよく場面転換する演出に感動しました。そして、どこかバントック先生の演出に似たものを感じました。また同年11月にはThe London Shakespeare Groupによる『マクベス』を観に白百合女子大学まで足を運びました。公演終了後、図々しくも楽屋まで押しかけ、出演者にサインをもらいました。「昨年マクベスを演じた」、と自己紹介をすると相手は少し驚き、サインと共に温かい励ましの言葉をもらいました。

1972年から翌年にかけては英語劇に相当なエネルギーを注いだようで、今でも夢を見ることがあります。セリフが頭に入っていないのに舞台に出ていかねばならず、舞台の袖に立って焦っている自分を夢に見るのです。それは授業の準備が不十分だとか、原稿の締め切りに追われていると

か、何か切羽つまった時に同じ夢を見るようです。大量のセリフを覚えざるを得なかったことがトラウマになっているのかもしれませんが。

研修旅行、英語教授法セミナー、English Salon

麗澤大学への貢献をいくつかご紹介します。1つ目は1984年の夏に実施した「カリフォルニア研修旅行」です。レッドランズ大学からやってきたTubbs先生と私は13名の学生を引率し、33日間、カリフォルニアとアリゾナを車で移動しながら研修旅行を敢行しました。事前研修、現地での体験、事後研修というモデルに基づいて実施しました。4月から週一のペースで放課後に事前研修として旅程の組み立て、研修内容の決定、アメリカおよびカリフォルニアの情報収集などを行いました。現地では、ギルロイ市のMorality Houseを皮切りに、サリーナス（スタインバックに関する講義）、フットヒル大学（カリフォルニア史とアメリカ史の講義）、スタンフォード大学（Pribram教授の神経心理学研究所訪問）、サンフランシスコ、ヨセミテ国立公園、マンザナール強制収容所跡地、グランドキャニオン、レッドランズ大学（Owada教授および奥様による講義）、ロサンゼルス、トーランスなどを訪問しました。有名観光地を訪問して楽しむだけではなく、色々な講義を受け、また2回ホームステイをするなど盛りだくさんの経験をしました。事後研修では英文の“California Study Tour 1984”という小冊子にまとめ、11月の大学祭では研修旅行の展示を行いました。麗大へのインパクトとしては、この研修旅行をきっかけに海外研修（翌年から英国研修が実施された）や留学が盛んになりました。

2つ目は1988年から始まった麗澤大学英語教授法セミナーです。当時、英語教員を対象にした教授法セミナーを実施している大学は皆無でした。1986年の夏、私は文部省主催の大学・高専英語教員の英国派遣事業に参加、英国のReading大学のCALSにて10週間の研修を受けました。同じプログラムに参加しておられた信州大学の渡邊時夫教授が研修中、しばしばKrashenのインプット仮説に言及していました。帰国後、私は渡邊教授の受け売りで「Krashen」とか「インプット」という言葉をよくゼミで使っていたところ、ゼミ生が渡邊先生本人からKrashenの話を聞きたい、と発言したのです。それがきっかけで、渡邊先生を講師としてお招きし、第1回教授法セミナーを開催するはこびとなりました。渡邊先生にはKrashenのインプット仮説を2日間にわたって講義して頂きました。初めての試みでしたので、何人くらいの現役教員の方に参加いただけるか、また予算の裏付けもなく、不安を抱えての船出でした。幸い、千葉県内の英語教育に影響力をお持ちの、本学の伊東正雄教授が千葉県英語部会に呼びかけて参加者を集めてくださり、成功裏に実施することができました。私は第1回から8回までを担当、その後は望月正道先生が引き継いでくださり、現在に至っています。このセミナーには教員志望の本学学生や本学卒業生の現役教員も参加します。休憩時間にお茶とお菓子を頂きながら講師を囲んでの懇親、卒業生

との再会も楽しみの1つです。

3つ目はEnglish Salonです。私が英語学科主任をしていた時、提携校のレッドランズ大学からアダムくんという学生が麗大に来ていました。英語科の学生たちに会話の練習をしたり、英語について質問したり、相談に乗ってくれる場所を提供できたらいいな、と思っていました。そこでアダムくんが英語科共同研究室に一定時間訪ねてもらい、そこに学生がおしゃべりに来るEnglish Salonを開設したのです。その後、新校舎「あすなろ」の完成に伴い、このアイデアが学部当局の目にとまったのでしょうか、eLoungeが生まれました。さらに現在では英語以外の言語も飛び交い、様々な発表会や報告会など各種イベントも開けるiLoungeとなっています。iLoungeは在学生だけでなく、オープンキャンパスでも大好評、麗大の魅力の1つになっています。

力を入れた時事英語の授業

麗大在学中の演習科目に「時事英語」（谷口茂先生担当）というクラスがありました。Mainichi Daily Newsという英字新聞を各人が定期購読し、授業では一面の記事を読みました。またNHKラジオの第2放送で、18:55から5分間放送していた英語ニュースCurrent Topicsの書き取り、いわゆるディクテーションを行いました。この授業は読解と聴解を組み合わせたユニークなもので、しかも国内外の出来事を英語で読んだり聴いたりできるのでとても新鮮に感じました。単語さえ覚えればやる気がでて、実力の伸びが実感できる授業でした。

麗大に就職してしばらく後に、この時事英語の授業を担当することになりました。基本的には谷口先生の授業の枠組みを継承しました。ただ学生の頃聞いていたCurrent Topicsは終わりを迎え、聴解の材料は別のソースから入手しなければならませんでした。結局、FEN（Far East Network、現在はAFN（American Forces Network）に呼称変更）の定時ニュースを採用することにしました。ただこの放送にはいくつか困難な点がありました。たとえばニュースを読み上げるアナウンサーが素人の場合があり、その結果読み間違いが起きやすい。また毎分250語は優に超えるスピードで読み上げるので、音の連結・脱落・同化といった音変化がよく起きて、慣れるのが大変でした。それに全国のニュースはまだしも、ローカルなニュースは内容的にお手上げでしたし、特に中継する記者の英語（voice insertion）は音質が悪く聞き取りにくい、などがありました。しかし小林克也氏などFENで英語を鍛えた達人は沢山いましたので、何とか教材化して新鮮なニュースを教室に届けたいと考えました。

毎週、手作りの教材（聴解と読解）を用いて授業を行いました。まずは聴解教材ですが、ニュースをラジカセで録音し、巻き戻しと再生を繰り返して書き取ります。書き取ったものをタイプ打ちして原稿を作り、ネイティブに聞かせ、確認してもらいます。訂正・確認が終わったらB4一枚にまとめ、ブランクを設けて穴埋め教材の完全原稿を作り、人数分の印刷をします。ここまでの音声教材の作成の段階

です。実際の授業ではプリントを配布し、学生持参のカセットテープにニュース音源をLL機器で一斉録音します。学生諸君は翌週までにその音源を何度も聴いてブランクを埋め、次の授業で、私の「この（ ）には何が入りますか」という質問に一人一人答えねばなりません。読解教材は英字新聞の記事（FENの聴解教材で取り上げたニュースに連動した記事）を切り貼り、プリントしたものを配布しておき、グループの担当者に音読と訳の発表をしてもらいます。私の役割は発音の確認とニュースの内容、文構造のチェックとなります。

現在も同じ内容の授業（English in the Mediaと名称変更されている）を担当しています。基本的枠組みはFENの頃と同じです。違いはFENがpodcastで配信されるNHK World Radio Japanに替わっただけです。時事英語は企業で使われている英語のレベルです。就活を考えてもこのレベルは目指して欲しいものです。私の授業をいくつか履修してくれた学生さんに「どの授業が印象に残っていますか？」と尋ねれば、昔なら「時事英語」、今の学生さんなら「メディア英語」と答えると思います。かつてアメリカ留学から帰った学生さんに、「時事英語のおかげでリスニングには苦労しなかったですよ」と嬉しいコメントをもらったことがありました。

私の専門と今後

今、半世紀に及ぶ英語との関わりを振り返ると、自分の専門は何だったのだろうか、考えることがあります。英語の教員ではあるのですが、何が専門ですか？と聞かれると答えに窮することがありました。しかし、英語の音声に関する分野、英語の歴史に関する分野に集約できるかもしれません。小学校の頃から音に関する関心はずっと持ち続けています。FENの教材作成のため、毎週かなりのディクテーションを行っていました。ネイティブにチェックしてもらった際、なぜこんな聞き間違いをしたのか不思議に思うことが何度もありました。実はその聞き間違いは歴史的音変化のルールに従った間違いだったりします。ラテン語のpaterが英語でのfatherに対応しているというグリムの法則がありますが、猛スピードの英語ではpatienceがfatienceという架空の単語に聞こえてしまうのはグリムの法則に照らして、当然起こりうる誤りです。そのほかに同化、派生語や借入語における音変化、歴史的音変化（大母音推移など）、綴りと発音の関係、また幼児語に見られる未完成な発音など、音声事象への興味は尽きません。

大学時代の先輩に英語を専門的にやるのなら、周辺の言語、少なくともドイツ語とフランス語は勉強しなさい、と言われました。先輩のアドバイスに従って、第二外国語にはドイツ語、第三外国語にはフランス語をとりました。大学卒業後にはスペイン語やイタリア語にも手を伸ばしました。学部の頃はチョーサーやシェイクスピアに関心があり、大学院では古英語や中英語の作品を読みました。このようなバックグラウンドのためか、麗大で英語史の授業も担当していますし、人にも私の専門は英語史です、と答え

ています。しかし、英語史の専門家と名乗るには、まだ不十分です。授業ではゲルマン語派は西ゲルマン語（英語、ドイツ語など）、北ゲルマン語（デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなどの北欧諸語）、東ゲルマン語（ゴート語）の3つに分かれる、というお話をします。英語史を専門としていますが、北ゲルマン語と東ゲルマン語はまだ本

格的に勉強しておりません。今後の目標は北ゲルマン語の基になった古ノルド語と東ゲルマン語に分類されるゴート語を勉強することです。これら2言語の入門書は院生の頃に関心しており、準備は整っています。あとは実行あるのみ。定年後は晴耕雨読と決めていましたが、雨読の方向性がはっきりしてきたようです。

中道嘉彦先生 主要業績

I. 著書

- イギリス中世演劇研究会編. 『中世ウェイクフィールド劇集』. (共著), 篠崎書林, 1987.
中道嘉彦他編著. 『これで読める・聴ける時事英単語集』. (共著), 麗澤大学出版会, 2005.
Nakamichi, Y. *KIRAIGŌ — Buddhist Folk Plays in Japan —*. (単著), Thomson Corporation, 2007.

II. 論文 (全て単著)

- “On the Use of the Historical Present in the *Gawain-Poems*.” 『藝文研究』, 第四十三号, 1982.
“On the Negatives in the *Gawain-Poems*.” *Reitaku University Journal*, Vol. 42, 1986.
“KIRAIGŌ, A BUDDHIST FOLK DRAMA.” *Reitaku University Journal*, vol. 59, 1994.
「英語はどのように聞こえるのか—FENの場合—」. 『麗澤レビュー』, 創刊号, 1995.
「FEN聞き取りのコツ」. 『麗澤レビュー』, 第2巻, 1996.
“GOKI HANDAN.” *Reitaku University Journal*, vol. 62, 1996.
「鬼来迎と英国中世演劇」. 『麗澤レビュー』, 第4巻, 1998.
“KIRAIGŌ MONDŌ NERIKUYŌ.” *Reitaku University Journal*, vol. 68, 1999.
「鬼来迎と追善仏教」. 『文学に読む＜生と死＞』, 岩元巖・中山理編著, ホソノスタンベリア, 2000.
“Kiraigō Plays and Some Common Characteristics with the Western Culture.” 『麗澤レビュー』, 第13巻, 2007.

III. その他

1) 研究ノート (全て単著)

- 「Huntington MS HM1」の足跡を辿る」. 『麗澤大学紀要』, 第45巻, 1987.
「ヤンケナイ、柏、Windsor」. 『麗澤レビュー』, 第3巻, 1997.
「機能語の聴き取り」. 『麗澤レビュー』, 第5巻, 1999.
「金札／鉄札と決算書—あの世への通行手形—」. 『麗澤レビュー』, 第6巻, 2000.
「「アリス」から「ハリー」へ」. 『麗澤レビュー』, 第11巻, 2005.
「『ガリヴァー旅行記』に見られる日本語地名」. 『麗澤レ

ビュー』, 第16巻, 2010.

- 「先祖返りする母音—派生語における母音変化について—」. 『麗澤レビュー』, 第19巻, 2013.
「語彙力アップの試みとしての「私の語根リスト」、「私の接頭辞・接尾辞リスト」作成」. 『麗澤レビュー』, 第22巻, 2016.
「Lの母音化 (l-vocalization) について」. 『麗澤レビュー』, 第23巻, 2017.

2) 辞典類

- 渡辺時夫監訳. 『英国を知る辞典』. (共訳, 編集委員), 研究社, 1988.
寺澤芳雄監修. 『BBI英和連語活用辞典』. (共訳), 丸善株式会社, 1993.
竹林滋編. 『研究社 新英和大辞典』 [第六版]. (共著), 研究社, 2002.
田中駿平, 中山理, 中道嘉彦, 中谷久一監訳. 『図解英和大辞典』. (共訳, 発音記号担当), マクミラン・ランゲージハウス, 2002.
小学館辞典編集部編. 『最新英語キーワードブック2003-04』. (共著), 小学館, 2003.
八木克正編. 『ユース プロGRESSIVE英和辞典』. (共著), 小学館, 2004.
小学館辞典編集部編. 『英語便利辞典』. (「日本の年中行事」, 「リスニングの要点」執筆), 小学館, 2006.

3) 文部科学省検定済高等学校用教科書

- PROGRESSIVE English Writing*. (著作者代表), 尚学図書, 1995.
PROGRESSIVE English Writing [Revised Edition]. (著作者代表), 尚学図書, 1999.
GENIUS English Readings. (共著), 大修館書店, 2004.
GENIUS English Readings [Revised]. (共著), 大修館書店, 2008.

4) その他

- 「パズル感覚でリスニング」. 『英語教育』, (単著), 大修館書店, 1999年10月増刊号.
寺澤芳雄編集. 『辞書・世界英語・方言』. (Judy Pearsall (ed.). *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Oxford Univ. Pr. 1998. 2003²の解題, 小西友七他 (編). 『小学館 ランダムハウス英和大辞典』. 小学館, 1994²の解題を執筆), 研究社, 2008.

温情春のごとく ― 中道嘉彦先生

犬 飼 孝 夫

中道嘉彦先生は、私が麗澤大学外国語学部に入學した昭和56年（1981年）当時はイギリス語学科（その後、英語学科に改称）の助手をされていました。今（2018年7月）から約37年も昔のことになります。ESSのスピーチコンテストに出るためにスピーチを書いていた時に、「ベルトコンベア」という単語のスペリングが分からなかったので、辞書で調べようと思ってイギリス語学科の共同研究室に行きました。その時、研究室に中道先生がおられて、何やら言葉を交わした記憶があります。それが中道先生との最初の出会いです。

その頃、中道先生は助手を務めながら、たしか慶応大学の大学院に通われていたと記憶しています。当時は多くの先生方が学園内にお住まいだったので、先生方の住宅を訪問して、小一時間ばかり英語で会話をするというESSの活動がありました。私は何人かの仲間と共に、北部住宅にあった中道先生のご自宅を訪問しました。まだ先生がご結婚されたばかりの頃だったと思います。「日本人同士で英語で話しても、あまり意味はないんだけどね」とおっしゃりながらも、我々と英語で会話して下さったのを覚えています。

その後、中道先生は英語音声学の授業を担当されることになりました。先生が担当された最初の授業を私も履修しました。教科書に沿ってキチッと分かりやすく講義して下さいたことを記憶しています。大学校舎の一角に録音室があり、そこで学生の英語の発音を録音し、それを再生しながら、各自の英語の発音の問題点を指摘して下さいたことを覚えています。中道先生の英語音声学の授業のおかげで、

英語の発音を上達させることができたと思っています。

中道先生は学生たちに「単位にならない勉強」が大切だとよくおっしゃっていました。つまり、授業以外の場面でしっかり勉強を積み重ねることが大切だということです。実際に中道先生は、担当されている授業の他に、英語検定1級合格をめざす勉強会を開いて下さいました。これは先生がボランティアで担当して下さいたもので、私も2年生の2学期から3年生の2学期頃まで、週に1回開かれた勉強会に参加しました。英検1級の問題集の問題を解き、後から中道先生が解説するというスタイルの勉強会でした。おかげで私は大学3年の冬に英検1級に合格することができました。中道先生のご指導の賜物です。

いつしか私は麗澤大学に教員として奉職させて頂くことになり、中道先生と今度は職場の先輩・同僚という立場で指導頂くことになりました。中道先生には非常勤の仕事を紹介して頂いたり、趣味で作っておられる野菜（主に大根）を頂いたりしています。37年にも及ぶ中道先生との付き合いのなかで、中道先生が怒っているお姿を見たことがありません。先生は後輩にも丁寧かつ親切に接して下さいます。中道先生のお人柄は春の陽のように温かく、先生は目上の人からも、同僚や後輩からも慕われています。麗澤大学の創立者・廣池千九郎の「温情春のごとく善人敬ぜんにんやまいた慕う」という格言をまさに体現されておられるのです。私も中道先生をロールモデルとして精進して参りたいと思っています。

中道嘉彦先生のご退職に寄せて

田 中 俊 弘

中道嘉彦先生は、私が最初に英語を教わった先生であり、学部時代の恩師でもあります。私が専任教員に採用された時の英語学科主任で、以後ずっとお隣の研究室の同僚でした。

父（田中駿平）の教え子でもあり、麗澤大学が4年間全寮制の小さな大学だった時代に、キャンパス内の我が家（教職員住宅）に、勉強会や懇親会でいらしていました。私が小学校高学年になると、やはり教職員住宅に住んでいた中道先生のお宅で、近所の子供達と一緒に英語のイロハを教えていただきました。この当時の話は、以前『麗澤教育』第12巻（2006年）でも触れましたが、私にとっては中学校で英語を学ぶ前のとても良い準備学習になりました。

『麗澤レビュー』第23巻（2017年）に、先生は、「Lの母

音化（l-vocalization）について」と題する研究ノートを執筆されましたが、それを拝読しながら、「カルピスは、アメリカでは別の商品名で販売しているんです。ルの音はウになるので、カルは牛（cow）のようになり、そこにピスが付くと、飲み物としてはとても具合が悪いのです」という話を、あの当時、我々相手におっしゃったのを懐かしく思い出しました。いかにも男子小学生が喜んで忘れない類の話ですが、他にも色々と、40年近くも前の断片的な記憶が蘇ることがあり、我ながら驚いています。

学部生の頃には、時事英語や英語学関係の授業で鍛えていただきました。時事英語は、雑音混じりのFEN（現AFN）のラジオニュースを、先生がご自身で毎回ディクテーションして虫喰いシートを作成し、それを授業で解か

せるスタイルでした。まだカセットテープの時代です。本当に勉強になりましたし、毎週の授業にそこまでエネルギーを注いで準備される先生の凄さを感じました。授業に限らず、先生は昔から、やる気がある学生を集めた英検対策やTOEFL対策の勉強会も続けていらっしゃいました。授業以外の場でも学生に関わる先生の姿勢こそが、私にとっては「古き良き麗澤大学」の伝統そのものでした。

私が専任教員として同僚になって以降も、様々な折に氣にかけてくださいましたし、学務や時事英語単語集などの仕事を通して、多くのことを教えていただきました。先生は、酒席のちょっとした雑談もよく覚えていらして、たとえば私が、禁酒家を指すteetotalerの綴りをtea-と勘違いしていたけれど、お酒を飲まずにお茶で通す感じでそちらの

方が絶対に良いと酔っ払って主張した翌朝には、「teetotalerのteeは、totalのtを強調させるために語頭音を重複させた形ですよ」と、大辞典を手にレクチャーに来てくださったのです。今ではお隣から私の部屋を覗いてそんな風にご教示いただくことがなくなり、それをとても寂しく感じています。

これからも中道先生には、卒業生や学生との関わりと研究の両面で、充実した日々をお過ごしいただきたいと思います。私たちは、先生が今までに築いてこられた麗澤大学の伝統を守れるように微力ながら努力していきます。まだまだ書きたいことは尽きませんが、先生への感謝の気持ちと共に、ここでペンを置かせていただきます。ありがとうございました。